

ダイヤモンド型授業

2024・9・3 重枝 一郎

教科指導は、「自分で自分を動機づける能力を育てる」「行動の模倣や試行錯誤する能力を育てる」という目標がある。ただ、その目標に向かう際にかかなり影響されることとして、学びの集団づくりがある。人間関係を育て、グループを育てる指導は、学力向上と表裏一体である。つまり、小集団での協力を体験するエクササイズやクラス全体で共同作業を体験するエクササイズは、表現力の育成や感情表出の訓練になり、授業を活性化することにつながる。

夏休みに入って、本校音楽科1・2年生と中3の音楽科希望の生徒1名が、ミュージカルの授業を受けていた。講師は、本年度、教育連携を結んだエリザベト音楽大学の先生である。「ウエストサイド物語」と「マンマミーア」の2つのグループに分かれて、指導を受けた。音楽科の生徒は個々人で努力することも多く、チームで目標に取り組むという貴重な経験をしていた。生徒たちの表情はとても楽しそうであった。Nコンを昨年度始めたのも同様の考えがあった。

新開先生も「アイスブレイクから始まる授業展開がとても参考になった」と。また、「響創コースの授業に取り入れられる」とも言っていた（舞台表現）。

私は、講師の先生と生徒との関係づくりを見ていた。具体的には、講師の先生の話し方、聴き方を見ていた。講師の先生の伝えたいことが、生徒に理解されているという手応えをもてるような話し方になっているところや、生徒の応答も、きっちり伝わっている実感をもてるような聴き方のところを見ていた（変な言い回しかもしれないが、感じ取ってほしい）。とてもすばらしい授業だと思った。

以前、私が研究授業等で、授業者に指導助言をする際、よく、その授業にネーミングしていた。

「流れ星授業」：教師の話聞いていない。教師の一方通行。これは、深刻な状態である。原因は、時に教師のパーソナリティによるところもあるが、教師と生徒の関係性に関わることが多い。

「扇形授業」：教師の発問が、生徒Aに受け入れられ、次にB、次にCというように、教師を窓口にして授業が展開する。これもあまりよくない。「他にないですか？」は一種の排斥語になる。せめて「続いてどうぞ」のようにつなぎ語にした方がいい。

「デルタ型授業」：「扇形授業」とは違い、教師という窓口を介さずに、生徒間で仮に3人意見が続く場合になる。

「星形授業」：5人続けば

「ダイヤモンド型授業」：それ以上

「デルタ型」「星形」「ダイヤモンド型」に進む過程で、「これはすごい、新記録だ」と生徒に実感させる。でも、なかなか教科の授業でこうはいかない。

学習意欲を高めるためには、ウェルビーイングを高めるのと同様、「やりがい」と「つながり」が効果的である。

実は、本校生徒会の研修で、私は、このねらいをもって、グループワークトレーニングを行った。「先生たちが住んでいるマンションⅡ」というものである。必然的に「ダイヤモンド型」を経験する。教材は貸し出せるので、いつでもどうぞ。